

## セネガルにおける言語ナショナリズムの系譜

砂 野 幸 稔

### 【0】はじめに

ルイ＝ジャン・カルヴェは1974年に出版された『言語学と植民地主義』において、サハラ以南のアフリカの反植民地主義ナショナリズムに言及して次のように書いている。

驚くべきは、つい最近になるまで、反植民地主義思想には言語問題がなぜか不在だったという事実である。1945年10月、ンクルマとジョモ・ケニヤッタを中心に「英語圏」アフリカの指導者が集まったマンチェスターにおけるパン・アフリカ会議においても、アフリカ民主連合を生み出した1946年10月のバマコ会議においても、「政治、経済両面における帝国主義的外国支配」からの解放（バマコ会議）や「社会的、政治的、経済的解放」（マンチェスター会議）が強調される一方で、文化的解放、とりわけ言語的解放については実質的に問題とされることはなかった。<sup>(1)</sup>

確かに、パン・アフリカニズムにせよ、ネグリチュードにせよ、サハラ以南アフリカの反植民地主義ナショナリズム全般を牽引した反植民地主義思想のなかには、フランス型国民国家を参照モデルとした19世紀以降のナショナリズムが不可欠と断言していい要素として内包していた「国民語」の思想は、少なくとも主要な要素としては見あたらない。

ベネディクト・アンダーソンが『想像の共同体』で示したように、<sup>(2)</sup> 19世紀の東ヨーロッパでは、帝国の支配のもとにあった諸民族が支配を脱し「国民」となろうとするナショナリズムは、出版資本主義の発展によって成立した「国民的出版語」を土台とする言語ナショナリズムを核として持ち、実際、その後曲がりなりにも成立した「国民国家」はそうした言語を「国民語」とする国家となっていた。

20世紀に入ってから反植民地主義ナショナリズムにおいても、アジアにおいてはインドネシアにおける「インドネシア語」の形成、ベトナムにおけ

る「クオック・グ（国語）」の整備など、言語問題は植民地解放運動のなかで重要な位置を占めていた。そして、成立した独立国家は、ここでもそれらの言語を「国民語」とし、教育、行政の言語として使用する国家となっている。インドにおけるナショナリズムも、少なくとも独立運動のプログラムとしては「国民語の思想」を重要な要素として含んでいた。<sup>(3)</sup>

それに対してサハラ以南のアフリカでは、独立への過程は言語問題を不問に付したまま進行し、独立後成立した新しいアフリカ人諸国家は、スワヒリ語を「国民語」として定着させることにおおむね成功したタンザニアの場合を事実上唯一の例外として、<sup>(4)</sup> ほぼすべてが独立後も英語、フランス語など旧植民地宗主国の言語を公用語として採用し、少なくとも言語に関しては植民地期と大差ない制度を維持し続けたのである。とりわけそれは、旧フランス領アフリカ諸国において顕著であった。

サハラ以南のアフリカにおける脱植民地化の過程に、言語問題が主要な問題としては見出せない理由を、カルヴェは次のように簡単に総括している。

（アフリカ人<筆者註>）知識人の大部分は、植民地主義と彼らに与えられた特権的教育によって文化的雑種と化してしまっており、支配言語、植民地支配者の言語に対しては受益者としての関係を結んでいる。変化など問題外なのである。<sup>(5)</sup>

支配者の言語で教育を受けた植民地エリートは、多くの場合支配者の言語の側に立つという指摘は、一般的には誤っていない。しかし、脱植民地化の過程から独立後にいたるまで、大多数のアフリカ諸国で言語問題が政治プログラムには組み込まれず、英語やフランス語などの植民地宗主国の言語が当然のように使われ続けた理由の説明としては、これではあまりに不十分である。問題点は二つある。

まず第一に、インドネシアにおいてもベトナムにおいても、ナショナリズムの担い手となり、新しい「国民語」を作り上げたのはオランダ語やフランス語に通じた植民地エリートたちだったという事実がある。タンザニアにおいても、スワヒリ語化を強力に押し進めたのは、初代大統領ジュリアス・ニエレレをはじめとする植民地体制のもとで教育を受けた英語エリートたちであった。全般に、植民地エリートは「層」としては植民地支配者の協力者であるが、脱植民地化の過程を中心になって押し進める指導者たちも、この同じ植民地エリートの層から生まれるのである。

第二に、カルヴェの指摘にもかかわらず、アフリカにも言語ナショナリズムは存在した、ということがある。

問われなければならないのは、なぜそうした思想が周辺的なものにとどまり、脱植民地化の政治プログラムの中に組み込まれなかったのか、ということである。

本稿の目的は、その一例として、植民地期から独立後にかけて、周辺的な位置から出発しながら徐々に影響力を広げていった、セネガルの言語ナショナリズムの系譜を記述することである。

アフリカの独立においては、政治的独立がしばしば形式のみのものにとどまったのと同様に、アフリカ文化の復権というスローガンも装飾的なものにとどまり、経済的従属はある意味では植民地期以上に深まったとさえ言えるが、政治的独立、経済的従属からの解放、アフリカ文化の復権、あるいはパン・アフリカニズム、アフリカ社会主義などという、植民地解放運動の過程で掲げられた理念が、流産するか不完全にしか実現されえなかったということは、必ずしもそうした理念がすでに無効となり、過去のものになったことを示すわけではない。それらは、未来を展望するための手がかりとして、検証され参照されるべきものとして存在し続けているのである。

これまで相対的に軽視されてきた言語問題についても、かつてどのような理念が掲げられ、どのようにそれが引き継がれ、あるいは流産していったか、振り返っておくことは無意味ではないはずである。

## 【1】反植民地主義ナショナリズムとしての言語ナショナリズム

### [1] フランス領アフリカにおける反植民地主義ナショナリズム

フランス領アフリカ植民地におけるナショナリズム思想としてよく知られているのは、他ならぬセネガルのサンゴールが喧伝したネグリチュードだが、文化的パン・アフリカニズムとして少なからぬ影響をおよぼしたこのナショナリズム思想は、現実の政治過程との関係では甚だしい矛盾を生きなければならなかった。1930年代にネグリチュードという言葉を生み出し、フランス植民地主義の同化主義に対する徹底した拒絶を突きつけたカリブ海のマルティニック出身のエメ・セゼールは、第二次大戦後成立した第四共和政のもとでは、マルティニックの海外県化、すなわち完全な政治的同化の推進者となったし、ネグリチュードの旗手となったセネガルのサンゴールは、植民地体制の大枠を維持しようとするフランス社会党と本国議会において共同歩調をとるだけでなく、セネガル植民地においても、独立を掲げる急進勢力との関係

ではむしろ植民地当局と利害をともしていた。

アフリカの独立への動きが始まるのは第二次世界大戦後のことだが、実は、フランス領アフリカにおいて「独立」が現実の政治日程に上り得るものとして意識されるようになるのは50年代末になってからのことである。54年のディエンビエンフーにおけるフランス軍の敗北後も、フランス国内では「アジアを手放しアフリカを保持しよう」というスローガンが掲げられ、アフリカ人政党にとっても「自治」が基本的目標だった。55年のバンドン会議は確かに独立への機運をたかめたが、フランス領アフリカにおいては、政治プロセスが「独立」へと突然急展開するのは、58年のアルジェリア危機とドゴールの登場以後のことにすぎない。

さらに、フランス領アフリカの脱植民地化の過程の特徴として、その過程を中心となって担っていったアフリカ人政党や労働組合組織が、フランス本国の政党や労働組合組織と密接に結びついていたということがある。50年代に入ると、政党も労働組合組織も本国組織への従属を脱し、独自の運動を展開するようになるが、フランス本国の政党や労働組合組織との密接な関係が途絶えたわけではなかった。

あえて単純化して言うと、フランス領アフリカ植民地においては、脱植民地化の過程は、植民地現地において「国民」を形成し、「国民」としての「独立」を植民地支配者に要求するという過程としてよりも、本国議会において既存の植民地体制内でのアフリカ人エリートによる「自治」の拡大と、アフリカ人の権利拡大を交渉する過程として進行した。

46年に「植民地の軛からのアフリカ諸国の解放」を目標として結成された「アフリカ民主連合 (RDA)」は、反共シフトに転じた本国政府の動きを受けて右旋回し、RDA内の急進派は植民地当局によって圧殺されるか周辺化された。フランス共産党系の労働組合組織CGTの影響下で組織されながら、急速に自立化し、「即時完全独立」を掲げたカメルーンの「カメルーン人民同盟 (UPC)」はフランス軍を投入した徹底した軍事弾圧で圧殺され、ドゴールの「フランス共同体」に「ノン」を投じたセク・トゥーレのギニアは、ドゴール政権による報復的なサボタージュを経験しなげなかつた。

少なくとも当時のナショナリズムの基本的傾向からすれば、ナショナリズムの核として構想されることがむしろ当然であったはずである言語の問題、すなわち「国民語」の問題が、フランス領アフリカの脱植民地化の過程において欠落していた理由は、脱植民地化の過程そのもののなかにある。進行したのは、ナショナルなもの形成に向けての動きではなく、植民地体制全体

の大きな枠組みを維持しながら、形式的な政治的独立を作り出す過程だったのである。

われわれが注目するのは、そうした過程の中で、現実の政治過程からは排除され、周辺化されていった、ナショナルなものの形成に向けての思想と運動である。

## [2]先駆者C.A.Diop：「アフリカ連邦」構想と「連邦諸国語」の思想

なかでも後の世代のアフリカ人知識人、とりわけセネガルの知識人、学生に大きな影響を与え、現在ますます注目されるようになっていく先駆的主張を行ったのが、エジプト学者のシェク＝アンタ・ジョップ（1923-1986）である。

彼は、1954年にパリのプレザンス・アフリケーヌ社から出版された『黒人諸国民と文化』<sup>(6)</sup>において、古代エジプト文明の黒人起源を論じ、アフリカ大陸の歴史をその起源から復権しようとするとともに、次のように主張したのである。

植民地支配によって発展を阻まれてきたアフリカ社会を、現代文明の中で再建していくためには、外国語にすぎない英語やフランス語ではなく、アフリカ人自身の言語を、現代文明に適応しえる言語として発展させていくことが不可欠である、と。

出版当時この書物は、古代エジプト文明を生み出したのが黒人であるという主張については、ほとんどのリベラル派の白人知識人や黒人知識人からも荒唐無稽のものと見なされ、アフリカ諸言語が近代文明を担い得るという主張についても、アフリカ諸言語は非論理的言語であり近代文明の受容には適さないという神話が黒人知識人の間でさえ「常識」であったその当時においては、まったく非現実的な主張と見なされたという。1979年の文庫版への序文でジョップ自身が伝えるところによれば、エメ・セゼールだけが、本書の議論を擁護した。セゼールは一晩で第一部を読み切ると、当時のパリの進歩的人士を片端から訪ねて、彼とともに本書の議論を擁護する専門家を捜したが、誰も受け入れなかったという。<sup>(7)</sup>

ジョップは自らの母語であるウォロフ語を具体例として用いて、アフリカ諸言語は非論理的で近代文明の受容には適さない、という神話を実証的に否定してみせている。

古代エジプト語と現代アフリカ諸言語の類縁性を主張するジョップは、現代ヨーロッパ諸言語がラテン語、古代ギリシア語を用いて科学技術用語をは

はじめとする現代文明の諸術語を作り出したように、現代アフリカ諸言語も古代エジプト語を用いて現代文明の諸術語を生み出すことができるとし、古代エジプト語の語根とウォロフ語の語根をウォロフ語の内的論理に従って組み合わせることで、数学、物理学等の用語を翻訳する用語を作り、さらに、いかなる論理、表現も翻訳可能であることを示すために、アインシュタインの相対性理論やギリシャ古典文学、現代ヨーロッパ文学のテキストをウォロフ語に翻訳して見せたのである。

#### 《「連邦諸国語」の思想》

ジョップの思想は、アフリカの脱植民地化後の「アフリカ連邦」の形成を展望するものだった。古代エジプト文明の黒人起源を論じ、アフリカの文化的統一性を主張し、アフリカ諸言語の類縁性とその発展を主張するのも、ともにこの「アフリカ連邦」をイデオロギー的に、そして制度的に準備するという明確な政治的意図にもとづくものだった。

『黒人諸民族と文化』の序文（1954年版）において、ジョップは、この著作の目的が、西欧植民地主義が生み出した黒人の文化的疎外の克服のために、黒人の過去を復権しようとするものであることを述べた後、そうした主張に対して予想される批判にあらかじめ反論を試みている。それはジョップの主張が、当時のアフリカ人フランス語エリートたちのどのような思想潮流の中で主張されたかを知る上で大変興味深い。

アフリカの過去の復権と民族文化の発展という主張に対する批判者としてジョップがまず想定するのは、マルクス主義者を含む近代主義者たちである。西欧文明を「普遍文明」とみなし、個別民族は克服されるべき対象でしかない、という考え方が、同化教育を受けた植民地エリートにも広く受け入れられていただけでなく、植民地主義批判を行うフランス本国およびアフリカの労働組合活動家を中心とするマルクス主義者たちにも、そうした考え方は共有されていた。

フランス領アフリカの脱植民地化の過程で主導的な役割を果たした「アフリカ民主連合（RDA）」内で、コートディヴォアールのウフェ・ボアニが率い、個別植民地別の分権的独立を主張する主流派に対して、連邦制を主張したギニアのセク・トゥーレらRDAの急進派は、フランス共産党系労働組合労働総同盟（CGT）系の組合活動家を多く含んでいたが、当時のフランス共産党は、植民地主義は批判しながら、他方で植民地の民族主義者を「ブルジョア反動」として批判するという立場を示していたのである。

また、そもそもアフリカに「民族／ネーション」と呼べるものが存在する

のかという疑問に対してもジョップは答えなければならなかった。彼は「エチオピア人、バンバラ人、ウォロフ人、ズルー人、ヨルバ人等はスターリンの（民族の一筆者註）定義に容易に当てはまるし、スーダン、コートダイヴォール、トーゴ、セネガル、ギニア、ニジェール、ケニア、南アなどには、《ネイション》の核が存在し、それが独立闘争の過程で強固なものとして形成されつつある<sup>(8)</sup>」、としている。この状況認識の当否は別にして、「植民地支配のために引かれた国境線は不可侵ではなく、将来変更すべくわれわれの意識変革を行っていく必要がある<sup>(9)</sup>」という主張は、民族、言語の分布をまったく無視して引かれた植民地の境界線を維持したままで与えられた「独立」の問題点を、反対側から浮き彫りにするものとして重要である。

ジョップの言語問題についての考え方は、こうした諸「ネイション」の形成と、それら諸「ネイション」の連合による「アフリカ連邦」の実現という政治構想に直結したものだ。そこには彼の構想する「アフリカ連邦」で話される「連邦諸国語」の思想とでも呼ぶべきものが表れている。

それは、一時期スワヒリ語を想定して考えられたユートピア的な単一の「アフリカ語」を想定する種類のものではなく、他方、単に植民地支配者の言語を廃してアフリカ諸言語一般を復権するという、無際限な多言語主義の主張でもなかった。ヨーロッパの「国民語」の思想を参照し、連邦を形成する諸国家がそれぞれ「国民語」を持ち、有力な少数の「連邦諸国語」を計画的に育成するという、明確な言語計画をともなった思想だった。

彼の構想は、ブラックアフリカの多言語状況を、「フランス語がバスク語やオクシタン語を封じ込めて広がったように<sup>(10)</sup>」諸国語を育成することによって克服するというものであり、「言語の発展可能性、政治的社会的重要性、拡大の潜在力、使用人口などから<sup>(11)</sup>」いくつかの言語を選び、基礎作業を開始すべきだというものだった。

それら「いくつかの言語」は明示されていないが、言うまでもなく、彼の構想において「選ばれるべき」主要言語のなかにウォロフ語が含まれていたことには疑問の余地はない。

ジョップの思想は、全体的構想としては「アフリカ連邦」を展望するパン・アフリカ主義的思想として展開されているが、民族と言語の問題については「ネイション」としてのウォロフ人、「主要な」言語としてのウォロフ語を提示することで、後のウォロフ語「国民語」ナショナリズムにも通じる道を開いているのである。

[3] 「在仏アフリカ人学生連盟 (FEANF)」の主張とアッサヌ・シラ論文：  
「国民語」ナショナリズムの萌芽

シェク＝アンタ・ジョップが『黒人諸民族と文化』で行った主張は、すでに述べたように、出版当時はエメ・セゼールを除いて注目する人はなく、フランス領アフリカおよびセネガルの脱植民地化の過程に直接影響をおよぼすことはなかったが、彼の歩みがまったく孤立した歩みであったわけではない。

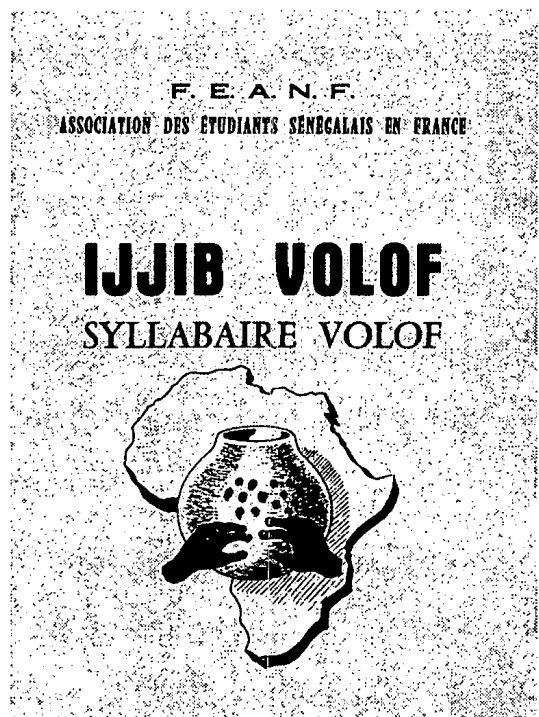
ほぼ同じ頃、植民地支配からの自立を主張する「在仏アフリカ人学生連盟 (FEANF)」に所属するセネガル人学生たちが、ラテン文字によるウォロフ語の文字表記システムを独自に考案し、それをテキストとして出版して、在仏のセネガル人学生への働きかけを行っていたのである。当時グルノーブル大学で学んでいた、後のIFAN (ダカール大学黒アフリカ基礎研究所) 教授アッサヌ・シラや作家で大統領府文化顧問のシェク・アリウ・ンダオらが中心となったこのグループは、演劇、詩作あるいはヨーロッパ語の文学作品のウォロフ語への翻訳を行い、そうした活動を通じてウォロフ語を文字言語として発展させようとしていた。<sup>(12)</sup>

FEANFは1950年、在仏のアフリカ人学生の学生組織として結成された団体だが、RDAがフランス共産党と袂を分かち右旋回した年に結成されたこの組織には、当時の進歩的學生組織としては半ば当然のことながら、マルクス主義思想の影響を色濃く受けると同時に、明確な反植民地主義思想が芽生えていた。

興味深いことに、独立後シェク＝アンタ・ジョップとともにサンゴール政権を批判し続け、投獄経験もある現大統領アブドゥライ・ワッドも、当時FEANFのグルノーブル支部長だった。<sup>(13)</sup>

また、マルクス主義者としてFEANFに大きな影響をおよぼし、1957年に「アフリカ独立党 (PAI)」を結成したマジムート・ジョップは、シェク＝アンタ・ジョップの『黒人諸民族と文化』の数少ない熱烈な称揚者の一人だった。<sup>(14)</sup>

1958年、アルジェリア危機を契機に





再登場したドゴールが呼びかけた「フランス共同体」憲法への国民投票に際しては、セネガルでは「ウイ」の投票を呼びかけるサンゴールの「セネガル進歩党 (UPS)」を批判して、FEANFは「即時独立」を主張し「ノン」の投票を呼びかけている。

1959年にFEANFと「在仏セネガル人学生協会」の連名で出版された『ウォロフ語綴字帳 (IJJIB VOLOF)』<sup>(15)</sup> は、序言で「ニグロ・アフリカ諸言語の大多数が、その発展過程において書記法の不在という問題を抱えてきた。(中略) 書かれない言語が蒙る損失と変形について語る必要があるだろうか。もしわれわれの言語が書かれていれば、どれほど多くの深遠な思想や哲学大系がわれわれのもとに届いていたことだろうか。コッチ・バルマ<sup>(16)</sup> のような有名な思索家の著作を手にしていただければ、われわれの喜びはいかほどであったらだろうか」とし、「言語資源の合理的な活用がなされ、大衆教育、いや単に教育に用いられれば、黒人の解放に寄与することになる<sup>(17)</sup>」と簡潔に趣旨を述べているだけだが、この綴字帳の作成と出版に直接携わったアッサヌ・シラと同じ時期の未刊の論文が、当時の彼らの言語ナショナリズムの内容をよく伝えてくれている。少し長くなるが下に紹介したい。

「言語と文学」と題されたこの論文は次のように始まる。

「植民地人民の解放闘争においてたたかひの文学が果たす役割を知らない者はない。(中略) しかしひとつの事実を確認しなければならない。アジアにおいても、中東においても、マグレブにおいても、この文学は土着の言語で表現されたが、ブラック・アフリカ、とくにフランスによって植民地化された地域では、作家たちは主にヨーロッパの言語で表現してきた。これは嘆かわしいことであり、できるだけ早く改めるべきことである。(中略) 自らの同胞に語りかけるのに、彼らが理解する言語を話すのは正当かつ自然なことではないだろうか。われわれの言語の持つ資源を活用しないのは、われわれの言語の発展を危うくすることではないだろうか。(中略) ヨーロッパの言語で表現することで、アフリカ人作家は少数の知識人だけに語りかけ、教育を、知的な糧を必要としているほかならぬ大多数の同胞は無視しているのである<sup>(18)</sup>」

しかし、ヨーロッパ語を投げ捨てよ、ということを主張しているわけでは

ない、とシラは言う。問題はヨーロッパ語の使用をやめることではなく、アフリカ語が教育や文学においてより重視されるようになることなのであり、遠くない将来において、いくつかのアフリカ語が主要な位置を占め、ヨーロッパ語は外国語としてのみ学ばれるようになることが目標である、と言うのである。

そしてアフリカ人の言語による教育と土着語文学の発展のもたらす利点としてシラは次の5点を挙げている。

- 1) 非識字の急速な減少（外国語より自らの言語で読み書きを覚える方がはるかに易しい）
- 2) 教育期間の短縮（母語で学んだ方が早く学べる）
- 3) われわれの文化遺産の保護と豊富化
- 4) アフリカ人知識人と大衆の間の溝の消滅
- 5) 文化的解放：自由のための闘いは、精神の「非植民地化」によって完成されなければならない。

ここには1980年代に入ってから創作言語としての英語との訣別を宣言したケニアの作家グギ・ワ・ジオンゴの主張する「精神の非植民地化」というテーマがすでに表れており、非常に興味深い。

しかし、ここでも「主要ないくつかのアフリカ語」という考え方が、ごく自然に表明されていることに注目したい。シェク＝アンタ・ジョップが「アフリカ連邦」というパン・アフリカ的理想を掲げながら、「連邦諸国語」という後の「国民語」ナショナリズムに通じる構想を示していたのと同様に、すべてのアフリカ語の名において語っているように見えるシラにおいても、彼の母語であるウォロフ語を筆頭とする「国民語」の形成がすでに重要なテーマとなっているのである。

彼は続けて言う。アフリカ語は中身のない貧しい言語で、現代世界の必要性に答えられないという議論は、瞞着である。あらゆる言語は無限に発展し得る。言語の発展と開花は知的エリートがその言語をどう使用するかにかかっている。キケロの時代、ラテン語はギリシア語に対して貧しい言語と見なされており、ローマ人知識人はギリシャ語を読み、話していた。ラテン語はキケロのように自らの言語の可能性を信じた知識人たちの手で発展した。フランス語も同様のことを経験した。ジョアシャン・デュベレーは『フランス語の擁護と顕揚』において、ラテン語で書くことに固執する人文主義者を批判

し、フランス語を豊かにすることを訴えた。ひとつの言語のある時代における発展水準がどのようなものであれ、それは決定的な要因ではないということをこうした例が示している。言語は柔軟であり、それを用いる知識人がその言語による経験の範囲を広げ、その活動領域を広げることによって、豊かになっていくのである、と。

それゆえ「われわれは同胞と後世に対して、われわれの諸価値を豊かにし、保護するために必要な努力を行うという責務を負っている。(中略)作家は、自らの創作と他の民族の文学の翻訳を通して、われわれの言語による文学を発展させねばならない<sup>(19)</sup>」のである。

将来の「国民語」としてのウォロフ語の発展に寄与しようとの意志の表明である。この論文でもウォロフ哲学者コッチ・バルマの名が挙げられているのがその一つの証である。

「われわれの言語は書記法の不在という問題を抱えてきた。コッチ・バルマのような思想家の名は残っているが、彼らの考えを正確に知ることはできない<sup>(20)</sup>」

ヨーロッパ語に対してアフリカ語一般を擁護するという汎アフリカのナショナリズムの色彩をまといながら、セネガルの「国民語」としてのウォロフ語をすでに想定した「国民語」ナショナリズムが、ここでもすでに生まれているのである。

#### [4]流産したナショナリズム

アフリカ人植民地エリートたちの間から、思想としては、アジアの脱植民地化の過程で形成されたものとはほぼ同様の言語ナショナリズムが誕生しながら、それが現実の政治プロセスの中ではまったく周辺的なものにとどまったのはなぜなのか。

言語の問題、すなわち「国民語」の問題が、フランス領アフリカの脱植民地化の過程において欠落していた理由は、脱植民地化の過程そのものの中にある、ということすでに指摘した。ナショナルなもの形成に向けての動きではなく、植民地体制全体の大きな枠組みを維持しながら、形式的な政治的独立を作り出す過程が進行する中で、生まれかけていたナショナリズムがその内実を失い、空洞化するプロセスが進行したのである。

とりわけセネガルの脱植民地化の過程は、ナショナリズムの空洞化が顕著

だった。

セネガルにおいて脱植民地化の政治過程で常に主導的な位置を占めていたのは、サンゴールの率いる「セネガル民主ブロック (BDS)」(のちに「セネガル進歩同盟 (UPS)」) だったが、サンゴールはRDAに参加せず、58年のドゴール憲法の投票の際には「ウイ」を呼びかけただけでなく、60年の「独立」へと急展開していく過程でも、セネガル一国としての「独立」についてよりも、植民地体制が残した制度を維持し、フランスとの結びつきを堅持することにむしろ主要なエネルギーを注いだのである。

それゆえ、サンゴールにとっての課題は、民衆を「国民」に練り上げていくナショナリズムではなく、ムーリディアとティジャニアという、民衆に対する圧倒的な影響力を保持し、すでにフランス植民地体制のもとで体制協力者となっていた二大イスラーム教団を懐柔し取り込むことだった。

FEANFの学生と組合活動家、マルクス主義者などのエリート知識人を中心とする急進派のナショナリズムは周辺化され、封殺されていったのである。

他方、サンゴールに反対するアフリカ人学生の側でも、自治植民地あるいは独立国家の「幹部」として植民地体制から引き継いだ政治機構の中枢を担うことをあらかじめ約束されている立場からは、植民地体制を批判しながらも、民衆を組織してオールタナティブとしてのナショナルなものを形成する動きは希薄だった。

言語ナショナリズムも、独立前後の激動の中で、新たな表現の形態を見出すことなく沈潜を余儀なくされることになる。

しかしそれは死に絶えたわけではなかった。

## 【2】独立後の新植民主義批判と言語ナショナリズム

### [1]ダカールの68年5月と対フランス従属批判

58年のドゴール憲法への圧倒的な「ウイ」から、60年の「セネガル・マリ連邦」としての「独立」と、事実上のクーデタとしての「セネガル共和国」の形成、そして62年の首相ジャの解任と投獄、66年の政党禁止措置とUPS一党独裁への移行と、68年の危機までの10年間は、旧宗主国フランスの全面的な支援のもとで「国家」という枠組みをかりうじて維持することが、サンゴール政権にとってはほぼすべてに優先する課題であり、未完の「ネーション」の形成どころか、むしろ政権の不安定化につながる「ナショナルなもの」への動きは封殺の対象だった。

こうした状況の中で、封殺されていたナショナルなもののエネルギーが噴

出したのが、ダカールの68年5月だった。

68年はじめに奨学金問題に端を発したダカール大学の学生の不満は、学長、学部長をはじめ主要なポストがすべてフランス人教授で占められ、フランスの大学システムにはほぼ完全に従属したダカール大学のあり方そのものにも向けられるようになり、5月、事態は瞬く間に無期限ストへと発展した。さらにその不満は、教員の過半がやはりフランス人「技術協力」スタッフで占められた高校に広がり、同様にフランス人幹部が主要なポストを占め続ける企業労働者にまで広がっていった。

ダカールの68年5月については、時間的同時性からフランスの68年5月との照応がしばしば語られるが、それはあまりにも表面的な観察であろう。世界的同時代性という観点からの照応は当然語られ得るが、ダカールの68年5月を生み出したのは、未完の脱植民地化、封殺されていたナショナルなエネルギーの蓄積だった。『ダカール68年5月』の著者アブドゥライ・バチリは次のように書いている。

当時の観察者たちが一致して認めていたことは、68年5月以前の時期は、労働界、知識人層、地元実業界、さらにはフランス企業のアフリカ人幹部においてさえ、反フランス意識が目に見えて高まっていたということである。未完の脱植民地化に対する人々の不満の表れであった。フランス人に代わって決定権のある重要なポストを占めるという希望は潰えたかのようなようだった。「セネガル化」を求める騒擾の激しさは彼らの幻滅の大きさを示していた。彼らの目には、セネガルはまだフランスの植民地のままだったのである。この若い国家の根幹となる主要なすべての領域（教育、行政、軍隊、警察、憲兵隊等々）で、多数のフランス人技術協力員の存在が際だって目につくことが、この不満をいやがおうにも高めていた。<sup>(21)</sup>

ダカールの68年5月は、賃上げや大学の一部「セネガル化」などの政府による弥縫策もあって一旦沈静化するが、本質的な問題が解消したわけではなく、この後も学生、労働者による騒擾は続くことになる。

サンゴール政権はこれに対して妥協を重ねていく。70年に首相職を再設置し、71年には大学の「セネガル化」を含む教育改革を行い、74年には3党のみという制限付きながら複数政党制が再開されている。68年5月に始まる社会危機はこれによって一応の収束を見るが、72年からは干魘が始まり、今度

は農民の不満が噴出し始めることになる。

[2]ウォロフ言語ナショナリズムのうねりー「国民語」の思想

セネガルの言語ナショナリズムはこうした動きの中で再び再生する。そして今度はセネガルという所与の国家の存在と、より具体的に「想像」されるナショナルな領域と「民族」のイメージ（それは後述するようにウォロフ人のイメージである）故に、「国民語」の思想としての性格をより明確に示し始めるのである。セネガル「国民」の「国民語」としてのウォロフ語という思想である。

もっとも強いインパクトを持ったのは、映画監督としても高名なフランス語作家のセンベヌ・ウスマンや言語学者のパテ・ジャンユらが展開し、多くの学生たちを巻き込んだ『カッドゥ』の運動である。<sup>(22)</sup>

ウォロフ語雑誌『カッドゥ』（ウォロフ語で「言葉」の意）は1971年から約5年間にわたって月刊で発行された。『カッドゥ』は文学、社会問題、科学などの広い分野にわたってウォロフ語の記事を掲載し、毎号フランス語の用語のウォロフ語訳語を示していた。タイプ原稿を謄写版印刷しただけのわずか30ページ程度のこの雑誌には、研究者などの知識人たちだけでなく学生を中心とした多くの若い世代の人々が参加し、フランス語で教育を受けた人々にウォロフ語の潜在力を教えることとなった。

この運動は、68年5月以来の社会危機に表現された反仏ナショナリズムの高まりの中で、当時の大統領サンゴールの徹底した親仏姿勢を新植民地主義的従属として批判する政治運動としての色彩を色濃く帯びていたが、言い換えれば、言語問題はサンゴールの対フランス従属姿勢を批判する知識人にとって、セネガル・ナショナリズムの象徴的な核となっていたのである。

センベヌ・ウスマンは1973年に発表した小説『ハラ（不能）』のなかに、この運動の持った「国民語」思想を明確に示す一節を挿入している。外国資



本に寄生するセネガル人ブルジョワジーの「不能」ぶりを象徴的に描くこの小説の主人公エルハジは、ある日自宅で自分の娘がウォロフ語で原稿を書いているのに気づく。

「お前はウォロフ語で書くのかい」

「ええ、雑誌を出しているのよ。『カッドゥ』というの。習いたい人には書き方も教えているわ」

「お前はこの言葉が国の言葉になると思っているのか」

「85パーセントの人が使ってるわ。あとは書くことを覚えるだけよ」

「フランス語はどうなるんだ」

「歴史的一幕にすぎないわ。ウォロフ語が私たちの国語よ」<sup>(23)</sup>

ここでセンベヌが示唆しているのは、まさしく「国民語」のイデオロギーである。エルハジの娘が言うように、セネガルではウォロフ語が事実上の共通語となっている。そのことに基づいて、ウォロフ語をフランス語に代わる、あるいはフランス語とならぶ「国民語」として採択し、「国民」全体の言語として優先的な地位を与えるべきだという立場である。それは、近代ヨーロッパ型国民国家の「国民語」のイデオロギーを参照する立場であり、プラール、セレール、マンダングなどウォロフ語以外の言語には副次的な位置しか与えないことが暗黙の前提となっているのである。

ここではもはや、『黒人諸民族と文化』のシェク＝アンタ・ジョップや学生時代のアッサヌ・シラがヨーロッパ語に対置するものとして語った「アフリカ諸言語」はもはや問題ではない。フランス語に対置される「国民語」としてのウォロフ語のみが問題なのである。

こうしたイデオロギーを補強するためには、「国民」の一体性（ウォロフ語を通じた）とその文化的「伝統」を語る必要性が生じる。多数派のウォロフ人と民族的帰属は異なってもすでにウォロフ語を自らの言語とみなす人々にとっては、セネガルの「国民語」としてのウォロフ語という等式はごく自然に成り立つが、セネガルがウォロフ人のほかにプラール人、セレール人、マンダング人、ジョラ人などの多民族で構成されるという事実とこの等式を両立させるためには、ウォロフ語がすでに人口の8割以上に話されるという事実だけでは十分ではない。ウォロフ語を通じた「国民」の一体性を語らなければならないのである。

すでにシェク＝アンタ・ジョップが『黒人諸民族と文化』においてアフリカ諸民族の文化的一体性を論じ、とくにセレール語、プラール語とウォロフ語の類縁性を語っているが、セネガルという「ナショナルな」枠組みの中で「文化的一体性」を語ったのは、センベヌ・ウスマンとともに『カッドゥ』を主宰した言語学者であり、1971年にアフリカ人自身による最初のウォロフ語文法書である『現代ウォロフ語文法』を出版したパテ・ジャンヌである。

その序文でジャンヌは次のように述べている。

ウォロフ語が包み込む文化世界は一民族の枠を超えている。ウォロフ語は、テクルール王国、ついでワーロ王国に属したローフ地方に発し、14世紀のジョロフ帝国の創設と拡張が、その拡大をもたらした。その結果、ウォロフ語は、伝統的に近い関係にあるプラール人とセレール人から多くの文化要素を受け入れた。マンダング人についてもその影響は無視できない。<sup>(24)</sup>

現在のセネガルの大半を支配下においていたジョロフ帝国の住民であった諸民族の歴史的、文化的一体性を語る論理は、独立後ダカル大学の黒アフリカ基礎研究所のイスラーム学の教授となり、1978年に『ウォロフ人の道徳哲学』を出版したアッサヌ・シラにも共有されている。

ウォロフ人と他の諸民族（トゥクルール、セレール、ジョラ、ソニケ、マンダング等々）は、通婚関係、文化的、宗教的関係、経済的、歴史的なつながりを通して、相互に浸透しあってきた。さらに、障碍のない自由な通婚関係、農村から都市への人口流入、そしてますます一般化するウォロフ語使用を通して、現在ではこれら諸民族がひとつの民族へと融合する動きが進行している。<sup>(25)</sup>

そして、それぞれの書物の中で、ジャンヌはウォロフ語の言語としての一体性を語り、シラはウォロフ人の「道徳哲学」すなわちその「民族的個性」を語ることを通して、ウォロフ世界の文化的一体性を語っている。民話や口承伝承の研究やウォロフ語イスラーム文学の伝統の研究なども、こうした流れに沿う形で行われるようになっていった。やはりIFANのイスラーム学の教授であったアマル・サンプの浩瀚な『アラビア語表現文学へのセネガルの貢献』<sup>(26)</sup>は、そうした研究の成果のひとつであり、その後も修士論文や博士



論文なども含め、地味だが「伝統文化」の内実を満たそうとする研究が相次いで行われるようになっていく。

70年代初頭の反サンゴール、反フランス・ナショナリズムは、先に引用したセンベヌの『ハラ』における「ウォロフ語がわたしたちの国語よ」というエルハジの娘の言葉のように、ウォロフ語ナショナリストたちが、フランス語支配を克服し実現される「国民語」としてのウォロフ語、という展望を、それほど無理のないものとして抱くことを可能にしていたのである。

### 【3】「国語」ナショナリズムの蹉跌

#### [1]「実施なき政策宣言」

68年5月に噴出したナショナルなエネルギーは、独立前の孤立した言語ナショナリズムと異なり、セネガル政府の言語政策にも一定の影響をおよぼした。「ネグリチュード」や「アフリカ社会主義」をまがりなりにも掲げるサンゴール政権は「対フランス従属」という批判にある程度答える必要があったし、また、行政官僚の間にも、ナショナルなものへの気分はある程度共有されていたのである。いくつか主要な動きを挙げてみよう。

まず68年7月にはサンゴール自身の手によって、「国語の転記に関する政令」が制定されている。転記の方法論に関する言語学者の批判を受けて71年に改訂されるが、六つの「国語」を指定したものである。もちろんこれは65年にユネスコが主催したテヘラン教育相会議で住民の使用言語による「機能識字」が謳われたのを受けたもので、71年の識字局の設置につながるものだが、68年5月の「セネガル化」要求に対する対応としての意味も持っていた。さらに72年には「初等教育の組織に関する政令」が発せられ、そこでは初等教育への「国語」の導入が謳われている。

これらの政令の文言を見ると、あまりに明確に「国語」の教育への導入が謳われていることにむしろ驚かされる。たとえば、71年に改訂された「国語の表記に関する政令」の理由書は次のように言う。

国語の表記に関する政令の目的は、小学校からダカール大学にいたるまでのセネガルの教育に国語を導入するためである。なぜなら、よい教育は、生得の言語によって、あるいは少なくともそれを用いて、自然に行われることから始まらねばならないことは、明らかだからである。<sup>(27)</sup>

また、72年の「初等教育の組織に関する政令」では、小学校におけるフランス語について定めた補則2の前文には、次のように国語導入の原則が高らかに謳われている。

どの言語もひとつの独自の文明を担うものであり、セネガル人が子どもたちに、彼らの母語をまず教えることなしに外国語を教え続けるならば、わが国民は疎外されたままにとどまるであろうとわれわれは考える。作業言語としてのフランス語への入門は、自らの文化の真の振興によってアフリカ人としての人格を保持するための、国語の教育への導入と同時に進めなければならない。<sup>(28)</sup>

少なくともこの文言を考えた官僚は、近い将来「国語」が教育に導入される状況を思い描いていたかもしれない。しかし、結局これらはすべて、ナイジェリア人言語学者アヨ・バンボシャの言う「実施なき政策宣言」<sup>(29)</sup>に終わることになった。そもそもサンゴール政権にはこうした文言を実施に移す意図はなく、さらに72年に始まった干魃はサンゴール政権そのものを弱体化させ、79年に構造調整策を受け入れることを余儀なくされたサンゴールは、80年12月、ついに政権を投げ出すのである。

## [2] 81年「教育国民会議」と「国語振興」

『カッドゥ』は資金難などのために発行を停止したが、こうしてひとつの政治的主張となった言語ナショナリズムは、1974年、三党のみに制限されていたとはいえ、サンゴールが複数政党制を認めたことで、新しく登場した野党のスローガンとして取り込まれていった。最初に政党としての登録を認められたリベラル野党「セネガル民主党 (PDS)」も1976年に登録を認められたマルクス主義政党「アフリカ独立党 (PAI)」も、ともに「国語」の教育と行政への導入をうたい、政党としての登録は拒否されたとはいえ1976年にシェク＝アンタ・ジョップが自ら結成した「国民民主連合 (RND)」は、「国語」ナショナリズムをその主張の中核に据えていた。

こうした流れが微妙な方向修正を余儀なくされる契機が、81年1月、サンゴールから政権を引き継いだばかりの新大統領アブドゥ・ジュフが開催した「教育国民会議」だった。

初等教育の就学率が30%にも満たず、教員数の不足と教員の待遇の悪化のために教育の質も低下し続けている状況は、経済の低迷と構造調整のもたら

す諸問題とともに国民の不満の集中していた問題であり、この会議の勧告は教育制度全体の見直しを求めるとともに、とくに「国語」の導入を強く求めた。そして政府はこの勧告を受けて専門家による「教育改革国民委員会」を設置し、84年に出されたその報告は、中央および地方の議会、行政、そして教育の前段階への「国語」の導入を謳っていた。その報告はウォロフ語を「国民統一語」として中央レベルの公用語とし、その他の「国語」には地方の議会や行政、そして初等教育の言語としての地位を与えるというものだった。はじめて「国語」ナショナリズムが主張していたことが、具体的な政策提言として示されたのである。

実は、この政策提言も、結局、否定されないとしても優先課題とは見なされず、IMFの構造調整受け入れ後も続いた経済危機、セネガル・モーリタニア紛争、カザマンス問題などの経済、政治の諸問題のために、事実上棚上げとされることになるのだが、それとは別に、「国語」ナショナリズムにとっては新たな問題が生じることになる。

ジュフ政権のもとで政党結成が完全に自由化されるが、事実上すべての野党が「国語」の導入をそのスローガンのひとつとし、また政治的にも無視できない重みを持つ教員組合も、すべての団体が「国語」の教育への導入を緊急の課題として掲げるようになっていっただけでなく、政府が少なくとも方向性としては「国語振興」を明確に謳うようになると、それまでそれほど強く意識されなかったウォロフ語とその他の言語の関係が、急速に問題化し始めたのである。

1980年代のセネガル国民議会での出来事として、次のようなエピソードが伝えられている。<sup>(30)</sup>

セネガル国民議会で使用される言語は、言うまでもなく公用語のフランス語だが、なかには学校教育を受けておらず、フランス語を十分に話せない議員もいる。ある時、そうしたフランス語を十分に話せない議員の一人が、大臣に対する質問をウォロフ語で行った。その日は、それはまったく問題とはされなかった。大臣は彼の質問を受けつけ、フランス語で答弁を行った。ところがしばらく後、今度はフランス語を問題なく理解するある野党議員が、ウォロフ語で大臣への質問を行った。大臣はそれに対して、自らの第一言語であるプルール語で答弁をしたのである。

ウォロフ語を当然の共通語と考えるウォロフ語ナショナリストへの、強烈なしっぺ返しである。

これ以降、ウォロフ語を前面に押し出し、「国民語」としてのウォロフ語

を強調する議論は、少なくとも公に主張されることはあまりなくなっていく。6「国語」すべてを、ついすべてのセネガルの言語を振興し、導入するという、想定される軋轢を回避する方向で、すべての公式の議論は行われるようになっていくのである。

### [3] 個別言語ナショナリズムの台頭

植民地期の言語ナショナリズムは、一貫して対フランス語・言語ナショナリズムとして主張されてきた。つまり、「外国語」であるフランス語のみが公用語であり、公教育の言語であることを批判し、アフリカの言語にこそそのような地位を与え、文字言語として発展させるべきだとする主張である。主張される構図は「アフリカ語」対「フランス語」という構図であり、「アフリカ語」の十把ひとからげの否定に対して、その「復権」が主張される限りにおいて、この言語ナショナリズムはある意味ではすべてのアフリカ語の名において語っていた。

独立後になると、対フランス語ナショナリズムという構図は維持されながら、この言語ナショナリズムの担い手となったウォロフ人を主体とする知識人たちが前面に押し出したのは、「国民語」のイデオロギーとでも言うべきものが明確に表れた形でのウォロフ語ナショナリズムだった。ウォロフ語をフランス語に代わる、あるいはフランス語とならぶ「国民語」として採択し、「国民」全体の言語として優先的な地位を与えるべきだという考え方である。

少数のウォロフ語知識人が限られたサークルの中で討議している限りでは、この「国民語」主義のはらむ問題はあまり意識されることはなかった。しかし、「国語」の導入が現実の政策目標として討議され、さらに成人識字教育がある程度大規模に展開されるようになり、他の言語について同様の動きが起こってくると、フランス語単一言語主義を批判することだけでは、もはや不十分となり、多数派の言語であるウォロフ語と他の言語の関係が問題になってくるのである。

国民議会でのエピソードで、ウォロフ語ナショナリズムの前に立ちはだかったのがプラール人の大臣であったことからわかるように、セネガルにおいてウォロフ語ナショナリズムが「国民語」としてのウォロフ語を主張することを妨げる第一の勢力がプラール語ナショナリズムである。

プラール人は、人口の半数近くを占めるウォロフ人には及ばないが、人口の二割強を占めるセネガル第二の民族集団であり、一般にウォロフ人とウォ

ロフ語に対する強い対抗意識と民族的誇りを持つ集団だと言われる。

実は彼らも、在仏のセネガル人学生たちがウォロフ語を通して言語ナショナリズムの動きを生み出しつつあったのと同じ時期に、プラール語を通じた言語ナショナリズムの動きをセネガル北部の古い都市サンルイを中心として生み出しつつあった。<sup>(31)</sup>

1950年代末、サンルイの名門校フェデルブ高校のプラール人高校生たちがプラール語のラテン文字による表記の研究を始め、58年に「フェデルブ高校プラール語研究グループ」を結成してプラール語の転記のシステムを考案したという。彼らは60年の独立とともに「青年プラール人協会 (AJP)」を結成し、アッサヌ・シラらの『ウォロフ語綴字帳』に一年遅れて『プラール語綴字帳』を発行している。

63年には「青年プラール人協会」は「プラール語再生協会 (ARP)」に改組され、ダカール大学に進学した学生たちを中心にダカール市内で識字教室を開き、プラール語のラテン文字による表記システムの普及を目指した。

ただ、彼らの場合も、基本的にはウォロフ語ナショナリストたちの場合と同様、主張されていたのは対フランス語言語ナショナリズムだった。「外国語ではなくアフリカ人自身の言語を発展させる」というのが基本的立場であり、そうした意味ではウォロフ語ナショナリストたちと彼らが対立していたわけではなく、対フランス語言語ナショナリズムを主張する立場は共有するが故に、ウォロフ語ナショナリストたちとの同志的連帯さえ時には存在したという。

しかし、そこには同一言語話者の結束を固め、自らの言語集団を防衛しようとする、対ウォロフ語言語ナショナリズムの傾向も見え隠れしていた。

そもそもプラール語という呼称そのものがそうした結束のためのものである。1976年の国勢調査の時点までは、プラール人は「プル (フルベ/フラニ)」と「トゥクルール」という別々の民族集団として分類されていた。彼らはほぼ同じプラール語 (フルフルデ語) を共有するが、古くからイスラーム化し定住生活を送るトゥクルール人と、もともと遊牧民でありイスラーム化も比較的最近であるプル人は、帰属意識を共有していなかった。ARPなどの運動を通じた言語ナショナリズムの高まりもあって、集団の規模としても多数派のウォロフ人と対抗しえる集団を形成しようという意図もあり、公的な場では「プラール」あるいは「ハル・プラール (単数) /ハル・プラール (複数) (フルフルデ語で「プラール語を話す者の意)」という共通の呼称を用いるようになったのである。セネガル政府は彼らの主張を容れ、1988年の国勢

調査以降は公式の呼称としては「プラール」あるいは「ハル・プラール」という呼称を用いるようになっていく。

プラール人はどの国でも少数派だが西アフリカの多くの国に散在し、西アフリカ一帯に広がる広域言語としての性格も持っている。ウォロフ語ナショナリストたちのなかには、一時期、「ウォロフ語はセネガルの国民語として発展させ、プラール語はマンダング語とともに西アフリカの国際語として発展させる」という一種の棲み分け理論を提唱することで、プラール語ナショナリズムを懐柔するような考え方もあったが、<sup>(32)</sup> セネガル国内で副次的な位置に追いやられることをプラール語ナショナリストたちが受け入れるはずはなかった。

1971年に「国語」による機能識字を掲げて設置された識字局は、新たに「国語」とされた6言語による成人識字を全国に展開することを目的として掲げ、1976年からは毎年「識字週間」の行事が催されるようになったが、実質的にはほとんど何も行われず、1990年代にはいるまでは有名無実のものにとどまっていた。

状況が大きく変わり始めるのは93年に「カナダ国際開発局 (ACDI)」の資金援助によって「識字1000クラスプロジェクト」が開始されたのを皮切りに、「国語」による成人識字プロジェクトに大量の外国資金が投入されるようになってからのことである。少数の巨大国際NGOの識字プロジェクトを別にすれば、それまで限られた地域で細々と活動していたにすぎない地元NGOが、こうした資金を受けて活発に活動するようになり、さらに諸「国語」の「言語協会」が結成されるようになった。「識字週間」の行事もさまざまな国際NGOを含む識字団体が参加する大規模なものへと変わっていった。

大量の資金の配分されるところに政治的利害が生じ、さまざまな動きが生じるのは半ば必然である。各「言語協会」は自言語集団の利害を主張する傾向を持ち始めた。

たとえば1994年、ユニセフと「カナダ国際開発局 (ACDI)」の資金援助によって、セネガルの主要三紙に「国語」による紙面が実験的に掲載されることになり、ウォロフ語、プラール語、ジョラ語の三言語が使用されることが決まったが、それに対しては「セレール語協会」が、人口の15%を占めるセネガル第三の言語集団であるにもかかわらず選ばれず、およそ6%を占めるにすぎないジョラ語が選ばれたことに抗議している。

さらに71年の政令で「国語」として認定された六言語以外の言語話者たち

が、「国語」としての認知を求める運動を始めた。人口の1%強を占めるだけだが隣国モーリタニアの言語でもあるアラビア語ハサニヤ方言の話者たちが、識字のための資金配分を受けられる「国語」としての認知を求めたのである。

植民地期とはまったく別種の「ミニ言語ナショナリズム」とでも呼ぶしかないものが生まれ、あるいは生み出されている。

#### 【4】結びに代えて：曖昧な多言語主義

結局、「国語の振興」というスローガンが体制化する過程で、植民地期から70年代にかけて存在していた、「国語」ナショナリズムの「ナショナルなもの」の形成に向けてのエネルギーは拡散していき、対フランス語ナショナリズムとしての「アフリカ人の言語の振興」が、植民地期のように象徴的に「すべてのアフリカ人の名において」語られるものとしてではなく、実際に「すべてのアフリカ語」を対象とするものになっていった。

シェク＝アンタ・ジョップの主張の中にあつたナショナルなものの形成に向けての明確な言語計画も、アッサヌ・シラヤパテ・ジャンユらの「国民語」思想も、ミニ言語ナショナリズムの登場とともに後退し、「曖昧な多言語主義」とでも呼ぶべきものが現在のセネガルを覆い始めている。

2000年にアフリカでは珍しい平和的な政権交代によって誕生したワッド政権は、初等教育への「国語」導入の方針決定、公務員への「国語」による識字の義務づけ、「国語アカデミー」の設立計画など、国語振興をさらに明確に謳っている。ワッド大統領自身がかつてFEANFの活動家であり、サンゴール政権、ジュフ政権の時代にナショナリスト的立場からの政府批判を行ってきたことから見ても、「国語振興」のスローガンはさらに現実の政策に取り入れられ得ていくであろう。しかし、軋轢を生み出す可能性のある積極的な措置がとられる可能性は現在のところ低い。

ワッドによって改正された新憲法では71年に指定された6「国語」だけでなく、「今後文字表記システムを備えることになるすべての言語を〈国語〉とする」<sup>(33)</sup> という文言が付け加えられた。以来現在までに5つの言語が付け加えられて「国語」の数は11となっており、その数は今後さらに増えると思われる。

就任の直後、ワッド大統領があるインタビューでウォロフ語をセネガルの「国民語」と見なしていると受けとられる発言をし、直ちに他の言語グループから激しい抗議の声が上がったということがあった。

現実にはウォロフ語が圧倒的な広がりを示し、セネガル全土の事実上の共通語として、テレビやラジオ、あるいはミュージックテープを通してさらに拡大し続ける中で、「特定の言語を優遇せず、すべての言語を平等に発展させる」という建前が、多言語状況を制御しえる言語計画に関する議論を封じる傾向が強く、将来を展望する議論が表れにくい状況が続いているように思える。

すべての言語を平等に振興するという方針のもとでも、現実にはマスメディアにおける使用においても成人識字においてもウォロフ語の使用が圧倒的に多いだけでなく、それが拡大しつつある状況に変わりはない。少数言語には象徴的な地位が与えられても、その使用領域が大きく広がる可能性は限られている。現実にはウォロフ語を中心とするいくつかの主要言語がさらに勢力を拡大し、少数言語は使用領域を狭められていくという状況を容認し、放置しながら、形式的にはすべての言語を振興するという多言語主義の建前が掲げられているのである。

曖昧な多言語主義は、結局、現状維持、つまり実質的なフランス語支配の状況の継続と、ほぼ同義語である。植民地期以来の伝統を持つセネガルの言語ナショナリズムは、ユネスコの唱える母語教育など、アフリカの言語状況にとってはほとんど非現実的な多言語主義の前に声を失っているように思える。

#### 【註】

- (1) CALVET, 1974, p.133.
- (2) アンダーソン、1997.参照。なお、アンダーソンは、「ガーナ・ナショナリズムはその国語がアシャンティ語ではなく英語なので、インドネシア・ナショナリズムほど本物ではないなどと言うことを示唆するものはなにもない。(中略) ナショナリズムを発明したのは出版語である。決してある特定の言語が本質としてナショナリズムを生み出すのではない (pp.210-211)」とし、言語ナショナリズムがナショナリズムの不可欠の要素であるわけではないことを指摘している。しかし、それは19世紀以降の東欧、アジアのナショナリズムが、それにもかかわらず言語ナショナリズムをひとつの重要な核として成長していったという歴史上の事実を変えるものではない。言語ナショナリズムを自らの本質的要素のひとつとして主張することがナショナリズム・イデオロギーのひとつの典型的な型であったことも、ここで想起しておきたい。



- (3) 藤井、2000.参照。
- (4) ソマリアでは1969年に軍事クーデタによって成立したバーレ政権が、独立運動時からの綱領に基づいてソマリ語を公用語とし、1980年代後半には初等、中等教育だけでなく、大学教育もソマリ語化しているが、1991年、アイディード派の攻撃によって軍事政権が崩壊して以来内戦に突入し、国家自体が崩壊したために、進みかけていた言語計画は頓挫している。
- (5) CALVET, op.cit., p.135.
- (6) DIOP, 1954.
- (7) *ibid.*,p.5.
- (8) *ibid.*,p.21.
- (9) *ibid.*
- (10) *ibid.*,p.416.
- (11) *ibid.*
- (12) 当時のグルノーブル支部のセネガル人学生の活動についての記述は、1987年および1991年に筆者が行ったインタビューの中でのアッサヌ・シラとシェク＝アリウ・ンダオの談話に基づいている。*IJJIB VOLOF* およびアッサヌ・シラの学生時代の論文“Langues et Littérature”は、シラが保存していた資料を複写させてもらったものである。
- (13) DIANÉ, p.65.
- (14) ALY DIENG, 2003, p.253.
- (15) FEANF/Association des Étudiants Sénégalais en France, 1959.
- (16) セネガルの口承伝承において「知恵の主」として称揚される17世紀に実在したと思われるウォロフ人哲学者。
- (17) FEANF/Association des Étudiants Sénégalais en France,op.cit,p.1,  
“LIMINAIRE”
- (18) SYLLA, 1959, p.1.
- (19) *ibid.*, p.4.
- (20) *ibid.*
- (21) BATHILY,1992, p.25.
- (22) 『カッドゥ』の運動については1991年に直接センベヌから話を聞くことができた。『カッドゥ』の運動が明確な反サンゴール運動として展開されていた、ということはそのときのセンベヌの指摘である。50号ほど発行されたという『カッドゥ』の現物は散逸してほとんど残って

いないようだが、センベヌ自身が手元に残していた数部の中から筆者は二部譲り受けることができた。図版は1972年8月号の表紙である。

- (23) SEMBÈNE, 1973, p.142
- (24) DIAGNE, 1971, p.11.
- (25) SYALLA, 1978, p.9.
- (26) SAMB, 1972.
- (27) CRELANS, 1977, p.3に引用。
- (28) *ibid.*, pp.4-5に引用
- (29) BAMBOSE, 1991, p.117.
- (30) FAYE, 1987, p.11
- (31) 「プラール語再生協会(ARP)」の歴史とプラール語ナショナリズムの運動については、1997年7月に筆者がサンルイで行ったARPの創設者ジビ・サル<Djiby Sall>氏（セネガル川開発公社<OMVS>地域資料センター所長）およびARPメンバーのママドゥ・ゲイ<Mamadou Gaye>氏（シェク＝ウマル＝フティユ・タル高校<lycée Cheikh Oumar Foutiyou Tall>教員）へのインタビューで得た情報に基づく。
- (32) 1987年7月の筆者によるインタビューでのシェク＝アリウ・ンダオの発言による。
- (33) 2001年1月17日のセネガル新憲法、第一条第二項の文言。

### 【主要文献】

アンダーソン、ベネディクト、

1997, 『増補 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』、白石さや、白石隆訳、NTT出版。

藤井毅、

2000, 「『多言語社会』において『単一言語』が指向されるとき—インドの歴史経験は何を語るのか」、『ことばと社会』3号所収、三元社。

真島一郎、

2004, 「六八年五月、ダカール—共和政体の翻訳論」、石井洋二郎、工藤庸子編『フランスとその<外部>』、東京大学出版会、pp.71-101.

ALY DIENG, Amady,

2003, *Les premiers pas de la Fédération des Étudiants d'Afrique Noire en France (FEANF) (1950-1955) (de l'Union Française à Bandoung)*, L'HARMATTAN.

- BAMBSE ,Ayo,  
1991, *Language and the Nation - The Language Question in Sub-Saharan Africa*, Edinburgh University Press.
- BATHILY, Abdoulaye  
1992, *Mai 68 à Dakar - ou la révolte universitaire et la démocratie*, Édition Chaka.
- CALVET, Louis-Jean,  
1974, *Linguistique et colonialisme - Petit traité de glottophagie*, Ed.Payot.
- CRELANS (Collectif de Recherches sur l'Enseignement des/en Langues Nationales au Sénégal),  
1977, *LES LANGUES NATIONALES AU SÉNÉGAL - Réalités et perspectives, No.1*, CLAD (Dakar, Sénégal).
- DIANÉ, Carles,  
1990, *La FEANF et les grandes heures du mouvement syndical étudiant noir*, Édition Chaka.
- DIAGNE, Pathé,  
1971, *Grammaire de wolof moderne*, Présence Africaine
- DIOP, Cheikh Anta,  
1954, *Nations Nègres et Culture I, II*, Présence Africaine (édition de poche, 1979).
- FAYE, Souleymane,  
1987, "Les langues du Sénégal", in *REALITE AFRICAINE & LANGUE FRANCAISE* No.21, 1987, CLAD.
- FEANF/Association des Étudiants Sénégalais en France,  
1959, *IJJIB VOLOF-SYLLARAIRE VOLOF*, Imprimerie des Deux-Ponts, Grenoble.
- SAMB, Amar,  
1972, *Essai sur la contribution du Sénégal à la littérature d'expression arabe*, IFAN.
- SEMBÈNE, Ousmane,  
1973, *Xala*, Présence Africaine.
- SYLLA, Assane,  
1959, "Langues et Littérature", article inédit.  
1978, *La philosophie morale des Wolofs*, Sankoré, Dakar.